

ラテンアメリカ都市物語

＝ 第1回 ＝

ラパスとエルアルト市
(ボリビア)

—ロープウェイが結ぶ2つの高原都市—

綾部 誠

筆者は1995年に青年海外協力隊の隊員としてボリビア多民族国（当時はボリビア共和国）に赴任して以来、現在に至るまで毎年、ラパス市にあるサンアンドレス大学（UMSA）において技術移転や産業開発の教育、天然資源開発に関連する人材育成に携わっている。特に近年は、日本人観光客が数多く訪問するウユニ塩湖に、世界埋蔵量の約半分程度が眠っているとされるリチウム資源を開発するための教育に力を入れている。

筆者の専門は、上述のようにラテンアメリカに関連する地政学や歴史学ではない。しかし本稿では、小生の長年のラパス市における教育活動の経験を基にして、以下にエルアルト市を含めた簡単なラパスの歴史や特徴について述べてみたいと思う。

その前にボリビアの言語について取り上げておきたいが、公式には約70%がカステジャーノ語（スペイン語標準語）、17%がケチュア語、11%がアイマラ語と発表されている（2012年の国勢調査）。ボリビア国内には、カステジャーノ語とアイマラ語、カステジャーノ語とケチュア語と、2つの言語を使用できる人も多い。特にここ10年近くは、政府の教育政策の変更により、英語などの外国語よりも、アイマラ語やケチュア語といった土着の言語習得が強く奨励されてきている。これは現政権によるボリビア人としてのアイデンティティ強化と、アイマラ、ケチュアといった言語の再評価が影響していることにある。そのため公的機関に就職する場合、これらの語学能力があるかどうか採用基準の1つになることもあるため、ラパスでもこれらの言語習得を目指す者が増えている。

さて、ペルーならびにチリと国境を接し、ボリビア

西部に位置するのがラパス県であり、その県庁所在地がラパス市である。ボリビアは世界でも珍しく2つの首都が存在し、憲法上の首都がスクレ、行政・経済の中心地で実質上の首都と呼ばれているのがラパスである。標高3,625mに位置することから世界でも最も高所にある首都としても有名である。ラパスは高山気候であるために一年を通して平均気温が低く（8℃程度）、夜間と日中との間の寒暖の差も非常に大きい。



山形大学とサンアンドレス大学の学生交流（背景はラパス市、筆者撮影）

ラパス県全体には270万人が居住しており、このうち、すり鉢状の形状を特徴とするラパス市には76万人が、同市より高地に位置し、ラパス市に隣接するエルアルト市には約84万人の住民が住んでいると言われている（2012年の国勢調査）。ラパス市は、すり鉢状の地形であるために面積が限られており、既に人口が過密・飽和状態にある。そのために隣接するエルアルト

市（高地の平地）の人口が年々増大し、居住地も徐々に遠方へと広がっている。現在のボリビアの人口は約1,080万人程度と推計されており（2015年）、この数値を基に計算すると、ラパス市の周辺都市部（含むエルアルト市）には約15%程度の人口が集中していることになる（ちなみにボリビアの面積は日本の約3倍程度である）。

ラパス市は、その形状ならびにアンデス山脈を背景に壮大な街並みを有していることから、2014年にはNew Seven Wonders Foundationが選ぶ「世界で最も美しい7大都市」の1つに選ばれている。

元々、ラパス市はアロンソ・デ・メンドーサ（Alonso de Mendoza）によって1548年10月20日に設立された。インカ帝国の支配を進めていたスペイン国王であるカルロス1世から委任を受けたペドロ・デ・ラ・ガスカ（Pedro de la Gasca）の命令を受けて作られたものであり、ペルー征服が完了したことを記念しての新都市の建設であった。この場所に町を建設したのは、ポトシとクスコの中継地点にあり、旅人が休憩をとるのに最適な場所であると考えられたからである。この都市の正式名称は、ヌエストラ・セニョーラ・デ・ラ・パス（Nuestra Señora de La Paz）、日本語で「我々の平和の母の町」と名付けられた。建設当初、この町は現在のラパスから西に位置するラハという地域に造られたが、アルティプラの強い風の影響や、当時、いまのラパス市がある地域に小川が流れており、小規模ながらも金を産出していたこともあり、現在の位置に町を移

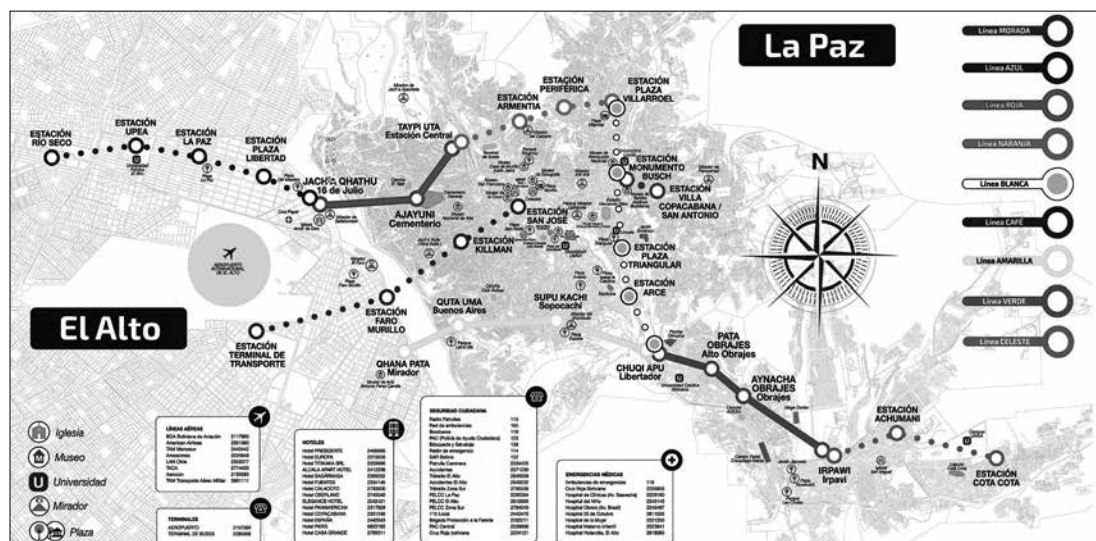
動した。以後、このラパス市はスペインの強い影響下に置かれ続けることになった。

その後、1781年には原住民による革命が起こり、リーダーであったトゥパク・カタリ（Tupak Katari）の指示のもと、約6ヶ月間、主としてアイマラ系住民がラパスを包囲し、教会や政府の所有物が破壊された。これはスペインによってこの地が事実上の植民地とされ、原住民が奴隷のように扱われ、過大な税の取り立てや植民地政府の不正に対する不満が鬱積し、これらを理由に白人層の多くが住むラパス市の占拠に繋がったとされている。その後、20年以上の月日を経て、今度はラパス革命が勃発する。1809年7月16日にペドロ・ドミンゴ・ムリージョ（Pedro Domingo Murillo）によって革命が起き、スペインからの実質的な独立への道が始まり、その後、アントニオ・ホセ・デ・スクレ（Antonio José de Sucre、ボリビア共和国の初代大統領）によるアヤクチャの戦いにおける勝利を経て、ラパスは1826年1月23日にチュキサカ、ポトシ、サンタクルス、コチャバンバとともに正式に市として位置づけられることになり、1898年に事実上の首都となった。

他方で、ラパス市北西部に位置するアルチプラノ（高地にある平地）に位置するのが、エルアルト市である。この都市は、他のボリビアの主要都市と比較すると新しく、標高は4,150mに位置している。人口規模は最近の統計では、ラパス市の人口を超えたという報告もなされており急拡大をしている都市でもある。

元々、エルアルトはボリビア政府がペルー、チリと

図1 ラパス市とエルアルト市の地図およびロープウェイの建設予定



※実践部分は既に完成しているロープウェイ、破線部分は建設予定の路線を示す。
 (出典) Ministerio de Comunicación (<http://www.comunicacion.gob.bo>) より引用。

の間に鉄道を敷設し、これを機に徐々に人口が増えてきた町である。鉄道事業による人口の増加に加えて、1923年にはエルアルト国際空港が建造され、これに従事する住民なども居住するようになった。チャコ戦争後には土地所有に関する制度を利用して地権者が増え、1953年には農業改革に関する法律が發布され、無秩序で政府のコントロールが効かない状態のなかでさらに移住者が増加した。

このように人口が徐々に増加するなかで、住民達は地区委員連盟を組織して、エルアルト地域の自主・独立を政府に対して主張・要望したがかなわず、1970年の大規模な住民運動を経て、1985年に正式にエルアルトに関する法律が制定され、同市および周辺区域がラパス市から行政的に分離されることが決まった。現在のエルアルト市は、大規模な工場が多く立地しており、商業製品の取引・売買等で経済活動が活発な町となっている。また農村部からの移住者も年々増えており、人口増加率は他のボリビアの都市と比較しても非常に高い。

ラパス市とエルアルト市の特徴としては、ラパス市内の低地（Zona Sur）には高所得層が数多く居住しており、高地に行けば行くほど、さらにエルアルト市の郊外に行けば行くほど低所得層が暮らすという傾向が見受けられる。しかしモラレス政権誕生後は、原住民系住民のなかにも高所得者が増えており、エルアルト市内の至るところに派手で豪華な5階建てぐらいのビルが点在するようになっていく。Zona Surにあるカラコト地区には昔からある高級住宅街に加えて、新たに建設された高層ビルも立ち並んでいる。巨大なショッピングモールや、10以上のシアタールームを有するで



ラパス市内の中心部（セントロ）の風景（筆者撮影）

あろう巨大シネマも、町のなかに複数存在し、営業を行っている。

筆者が初めてこの地に立った22年前と比較すると、ラパス市の中心部については、信号があちこちにでき、店が入れ替わった程度の変化しかあまり感じ取れないが、エルアルト市の郊外や南東部にある高級住宅街に一步足を踏み入れると、その発展ぶりには驚くものがある。低地の高級住宅街には、お洒落なレストラン、バー、ブティック、ショッピングモールが新たに開業し、エルアルトでは、昔は何もなかったアルティプラの大地に、レンガでできた住宅が林立し、巨大な町が新たに形成されている。このような変化からも、ボリビアの近年の天然資源の輸出を背景とした経済発展の力強さと、国民の所得向上の勢いを感じることができる（ちなみに政府発表によると2006年以降の平均的な経済成長率は年換算で4.8%と高い値を示している。しかし昨年からは始まった天然資源価格の下落は今後の同国の経済に大きな影響を与えるであろう）。

ラパス市は、ボリビアの中でも商業の発展している地域である。ラパス市から離れてアルチブラノに移動すると、ジャガイモ、キヌア、麦などを、また低地のユンガス地域に行けばパイアやオレンジなどの果物やコーヒー豆の栽培などが昔から盛んであるが、ラパス市内だけを見ると、行政機関、銀行、民間企業等のオフィスビルが林立・集中しており、正にメトロポリタンという名称に相応しい様相を呈している。

市内は、いまでも古い形式のマイクロバス、ミニバス、タクシー、テウルフィー（区間乗り合いタクシー）などで大渋滞は当たり前であるが、近年は交通渋滞の緩和のために導入された日本の都市部にもあるようなブマ・カタリという市内循環バスやロープウェーが人々の移動手段に加わっている。特に市内を横断するロープウェーは値段も安く（1回の利用で45円程度）、渋滞による遅延も生じないために、いまやラパスとエルアルトの両市民には欠かせない交通手段の1つとなっている。現在は赤・黄・緑の3路線が開業しており（赤路線：16 de Julio（エルアルト）～ Estación General（ラパス）、黄路線：Mirador（エルアルト）～ Libertador（ラパス）、緑路線：Libertador（ラパス）～ Irpavi（ラパス））、政府の計画では今後、9路線まで増設し、エルアルト郊外とラパス市内を結ぶ路線、ラパス市内を縦断する路線を新設する予定であり、利便性の拡充を目指している。通常、多くの国々では、ロープウェーは観光地やスキー場などで用いることが一般的であり、



ラパスとエルアルトを繋ぐロープウェイ（筆者撮影）

交通手段として用いることはあまりない。加えてロープウェイから見ることできるラパス市内の絶景は壮大であることから、いまでは外国人観光客には欠かせない観光スポットになっている。

ラパス市は製造業が23%、商業が23%、サービス業が54%を占めており、サービス業の比重が高い。一方のエルアルト市は商業が35%、サービス業が32%、建設業が20%、製造業が13%となっている。ラパスならびにエルアルトの両市では、約85%が従業員4名以下の零細企業に勤めている。特にエルアルト市は、インフォーマルな職業も数多く（例えば露天商）、近年は地方から流入する人々の高い失業率が社会問題となっている。農村部での生活を諦めて商業の盛んな首都圏郊外に移り住んだものの仕事がなく、犯罪に手を染める者も多い。確かにモラレス政権になってからは、貧困撲滅を旗印に母子や子供に対する支援制度が拡充されてはいるものの、エルアルトにおける根本的な失業問題は、解決にはまだ道が程遠い。

人々の気質については個人的な意見になってしまうが、これまでにボリビアで知り合った人々、知人や友人、山形大学で数多く受け入れてきた同市出身の留学生の性格から観察すると、ラパスの人々は非常に真面目で、コツコツと仕事・努力をする者が多いという印象を持っている。またとても純粋で親切な人が多いという印象も変わりなく持ち続けている。このような気質や性格は、日本人にもよく似ていると感じている。

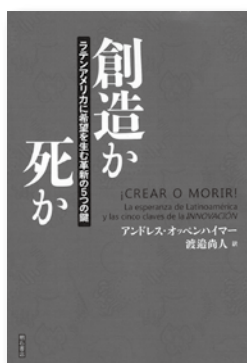
以上、ここまで私見という立場で、エルアルト市を含めたラパス市の概要について述べてきた。ラパスは日本から非常に遠く、また標高も高い都市ある。近年

はウユニ塩湖を訪問する日本人観光客も多くなっており、その中継地点となっているのも同市である。このラパスという町に、一人でも多くの日本人に滞在してもらい、その魅力と迫力を堪能し、人々の温かさにも是非、触れてもらいたいと願っている。

（あやべ まこと 山形大学学術研究院・准教授、サンアンドレス・ボリビア国立大学客員教授）

（参考文献）

- ・ Carlos Gisbert “ENCICLOPEDIA DE BOLIVIA” OSEANO.
- ・ José de Mesa Teresa Gisbert, Carlos D Mesa Gisbert “HISTORIA DE BOLIVIA” Editorial Gisbert y CIA SA. LA PAZ, 2003.
- ・ 真鍋周三『ボリビアを知るための73章』明石書店、2013.
- ・ Municipio de La Paz “diagnóstico, estructura e indicadores de empleo” 2013.
- ・ Municipio de El Alto “Estadística del Registro de Comercio de Bolivia” 2016.
- ・ Instituto Nacional de Estadística 2012 (<http://www.ine.gob.bo/>).



『創造か死かーラテンアメリカに希望を生む革新の5つの鍵』

アンドレス・オッペンハイマー 渡邉尚人訳 明石書店
2016年4月 383頁 3,800円+税 ISBN978-4-7503-4340-2

本書はマイアミ・ヘラルド紙の名物コラムニストでピューリッツァー賞受賞者、米州で絶大な人気を誇るジャーナリストのアンドレス・オッペンハイマーの『米州救出』(2011年 時事通信社)、『ラテンアメリカの教育戦略』(2014年 時事通信社)に続く、ベストセラーの初の邦訳。

21世紀の発展の柱である革新と創造につき、米州での驚くべき現状につき紹介している。マイクロ・ソフト創始者ビル・ゲイツや冒険企業家リチャード・ブランソン、反転学校のサルマン・カーン、ペルー革新料理人アクリオ、革新的サッカー監督アルゼンチン人グアルディオラ、社会的起業家チリ人ゾレージ、コンピューターの認証文字発案者グアテマラ人フォン・アン等世界的革新者達とのインタビューを通じ、その革新の秘密を明らかにしてゆく。そして、なぜ中南米にビル・ゲイツやスティーブ・ジョブズが生まれないのかにつき考察し、中南米の潜在的創造力と革新を開花させるための5つの秘訣(失敗を容認する革新文化等)を引き出す。本書は、“創造と革新”を切り口に、北米から見た米州の知られざる状況を複眼的視点から紹介しており極めて興味深い。

著者の米州に関する考察は、これまで実にラテンアメリカの現実に驚くほど当てはまってきた。過去に執着し未来を見ず、国威発揚のために国家の英雄の墓を掘り起こし、イデオロギーに固執し、教育を国際化せず、天然資源に依存し続けるラテンアメリカの国々は、教育、科学技術、革新の知識経済時代にますます後れを取るだろうとの考察は、現在凋落傾向にあるラテンアメリカの強権イデオロギー的な国々にとっては、まさに現実のものとなっている。本書は、ほぼ15年毎に左派と右派、自由市場経済と国家主導経済との間を振り子のように揺れ動くラテンアメリカが真に発展の地域となるための多くのヒントと助言を提供している。

(訳者 渡邉尚人)



『アンデスの自然学』

水野一晴編 古今書院
2016年3月 228頁 4,300円+税 ISBN978-4-7722-2021-7

アンデスという特定の地域を取り上げた自然の概説書。アンデスの地形・地質、気候、土壌、植生・環境帯、土地利用、気候的特徴と近年の気候変化、氷河変動と古環境変遷、土壌や植生の発達や植生遷移、分解菌類や微生物、アンデス高地に広がる欧州の植物やアンデスの自然と牧畜社会に至る事例研究、さらにアンデスとの比較で東アフリカのタンザニア、ケニアの牧畜民と農耕社会との共通性と違いを示した総合的な自然概説書。

地理学、農学、植物学、歴史気候学、菌類・微生物学等のフィールド調査経験豊富な20人の研究者が執筆しており、アンデスを知るための基礎的な知識が得られる。

(桜井 敏浩)



『物が落ちる音』

ファン・ガブリエル・バスケス 柳原孝敦訳 松籟社
2016年1月 314頁 2,000円+税 ISBN978-4-87984-344-9

1995年、コロンビアの首都ボゴタのピリヤード場で法学の専任教員になったばかりの私はリカルド・ラベルデと出会い付き合うようになった。小型機の元パイロットであり、20年近く服役していたようで、米国人の妻エレナ・フリッツが居ることぐらいしか素性は判らない。この年の12月にマイアミを発ってカリに向かったアメリカン航空が、墜落し乗客の大部分が死亡する事故が起きている。翌年早々会った時、リカルドは持ってきたカセットテープを聞ける場所を尋ねられ、詩歌会館で聞けるように取り計らい、その後一緒に歩いていた街頭で彼は殺し屋に射殺され、私も重傷を負う。

2年半後、リカルドの居た家を訪ねた私は管理人が保管していたカセットテープを聴くことを許された。それはエレナも搭乗していた墜落機のボイスレコーダーで最後の瞬間の操縦室の声が聞こえた。その後まもなく管理人に残した私の電話番号の留守録に地方の山地に住む女性の伝言が入り、彼女、マヤ・フリッツを訪れることにした。マヤこそエレナとリカルドの間に生まれた忘れ形見で、母が米国の平和部隊に参加してコロンビアに来て、そこでリカルドと知り合い愛し合うようになって結婚したのだが、実はリカルドは初めは大麻の飛行機輸送でそこそこ財を得、最後には1回だけとの約束でコカイン密輸のため飛行した際に麻薬取締局に逮捕され服役していたことを知る。当初メキシコ経由だったのが、ニクソン大統領の麻薬戦争宣言でルートがコロンビアに移されたのだが、そのメキシコ、コロンビアに滞在経験をもつ一部の平和部隊員が仲介役として暗躍し、リカルドもその一人に利用されたのだと判る。

希望と善意に溢れた青年達により構成された平和部隊の一部が麻薬の供給という国家に敵対する活動に関与していたという衝撃的な事実を交え、不慮の死を遂げた関係者の人生を再構築して辿るという小説の面白さを堪能できる。

〔桜井 敏浩〕



『ブラジル雑学事典』

田所 清克 春風社
2016年3月 438頁 5,000円+税 ISBN978-4-86110-496-1

40年あまりブラジル地域研究、ブラジル文学の研究を続けてきた田所京都外国語大学教授が、これまでの多岐にわたる分野の論考を一人でまとめたブラジル学事典。

自然と社会、アマゾン、パンタナールやリオデジャネイロを述べた「地理」、ブラジル「発見」からアフリカ、先住民に根差した社会思想に至る「歴史」、新たな文化・文明に参画する民族集団としての日系等についての「移民（史）」、「経済」「社会」、カーニバルを例に「民俗」、欧州・アフリカ系・人種混交の「民族」、日系ブラジル人を例にした「教育」、そして著者の得意分野である「文化」では、「言語」としてポルトガル語、インディオの言語、ブラジル「文学史」、「文学論」、「作品論」を詳述し、それに「音楽」、カボエイラやサッカーの「スポーツ」、「飲食文化」も解説している。加えて様々なテーマの「随想」、ブラジル学のための短い解説を付した「文献」リスト、ブラジルについての知識の広さを窺わせる24の「コラム」が収録されていて、政治経済解説とは違った、著者ならではのブラジルの解説を楽しみつつ、ブラジルをいろいろな角度から理解するに資する雑学集大成である。

〔桜井 敏浩〕